書評 佐々木正明『「動物の権利」運動の正体』

浅野幸治

本稿では、佐々木正明『「動物の権利」運動の正体』(PHP 新書、2022年)を批評する。本書は、前半(第3章まで)と後半(第4章と第5章)に分けることができる。前半はヤブキレンとアリスユの人と活動の紹介である¹。この2人が、前半の物語の主演男優と助演女優と言ってよい。そこでは、反イルカ漁運動と言われるけれども、実際のところ、どういう人がどういうことをしているのかが紹介される。レンとサユは、「動物の権利」運動を担っている人のほんの2例にすぎない。そこから、「動物の権利」運動を担っている人たちはどうだという一般化はできない。そういう一般化は「性急な一般化」の誤謬と呼ばれる。例えば、レンが田舎育ちだから、「動物の権利」運動を担っている人たちはみな田舎育ちだということはできない。サユが家庭内暴力の被害者だから、「動物の権利」運動を担っている人たちはみな家庭内暴力の被害者だということもできない。とはいえ、レンとサユに共通な点もある——動物への共感である。おそらく佐々木がレンとサユを紹介するのは、2人の具体的な姿を見て、それを入り口として「動物の権利」運動に入っていこうということなのだろう。

「動物の権利」運動の基底にあって原動力となっているのは、「動物の権利」思想である。「動物の権利」思想(およびそれと一体になった「ビーガン」という生活実践)が、「動物の権利」運動を担う人たちに共通であり、「動物の権利」運動を理解するために重要な部分である。だから、「動物の権利」思想が、佐々木が述べるように、本書の主目標と言ってよい(9頁)²。本書の後半で、佐々木は「動物の権利」思想と「ビーガン」という生活実践を紹介する。

前半におけるレンとサユの具体的な紹介と後半における「動物の権利」思想の紹介——このどちらにおいても、世間であまり知られていないことを広く紹介したという点に本書

¹ ヤブキレンは、「生物調査局(Life Investigation Agency)」を名のる「動物の権利」運動団体の代表者である。アリスユは、アニマルライツ大阪の設立者である。生物調査局(LIA)については、そのホームページを参照。<https://ngo-lia.org/>

² ()内の頁数は、特に断らない限り、すべて佐々木『「動物の権利」運動の正体』の頁数である。

の功績がある。

本書の書誌情報にも奥付にも書かれていないけれども、実は本書の執筆者は佐々木正明だけではなく、第5章はジェイ・アラバスターが書いている。評者としても、佐々木とアラバスターをあまり区別せずに本書を批評していく。また評者自身は、動物権利論の立場に立つので、その視点から批評する。

以下では、初めに、比較的重要な内容面を中心に第4章と第5章について批評する（第1節から第4節）。その後で、女性への着目その他の個別的な点を述べていく（第5節と第6節）。

第1節 「動物の権利」思想

第4章で佐々木は、「動物の権利」思想を紹介する。「キーワードは「動物の権利」と「ビーガン」である」（132頁）。

まず「動物の権利」という考えを佐々木は、ピーター・シンガー『動物の解放』（1975年）とトム・リーガン『動物の権利擁護論』（1983年）とゲイリー・L・フランシオン『動物の権利入門』（2018年）に依拠して説明する。シンガーからは次のように種差別という考えを紹介する。

「その属する種 (species) のみを理由として動物を差別することは偏見の一形態であって、これは人種に基づく差別が不道徳で擁護しえないのと同様に、不道徳で擁護しえない」（133頁）

言い換えると、動物には差別されない権利があるということである。これは通常は積極的に、「平等な配慮を受ける権利」³と呼ばれるものである。どうして動物にはそういう権利があるのかという点に関して佐々木は、リーガンに依拠して次のように説明する。

知覚や欲求などの感覚を備える生き物はすべての自由の権利や生きる権利を持ち、人間と同等の権利を認めるべきだ（133～134頁）

³ シンガー『動物の解放』、28頁。

つまり、知覚や欲求などの感覚を備えることが、生命権とすべての自由権の根拠になるということである。これは、別の見方をすると、権利を有する動物の定義と言うこともできる。これで、知覚や欲求などの感覚を持たない木石には権利がないということが説明される。

次いで「ビーガン」の定義を佐々木は、マーク・ホーソーン『ビーガンという生き方』に依拠して⁴紹介する。

ビーガンとは、動物搾取の産物を可能な限り一掃しようとする考え方で、具体的には、肉・乳・卵・蜂蜜などを避け、衣では絹・革・毛皮・羊毛などを避け、さらに動物実験を経た化粧品を避け、こうした動物搾取を推進する企業や研究に反対する社会運動である（136 頁）

「動物の権利」と「ビーガン」は、佐々木も述べるように「表裏一体の関係にある」（132 頁）。動物に権利があるから、その侵害である動物搾取を止めようというのが、ビーガンだからである。この点の説明として佐々木は、フランシオンの言葉を引用する。

「動物に道徳的権利があるとして、人間は結果に関わらず動物搾取をただ規制するのではなしに廃絶しなければならない」（134 頁）

この引用はフランシオンの『動物の権利入門』の文脈から切り離されているので少し分かりにくい。けれども、それを考慮に入れて直せば、佐々木の本書の中で、引用の「動物には道徳的権利があるとして」の部分「動物に道徳的権利があるので」と読めばよい。「結果に関わらず」というのは、大きな便益のためであっても権利が犠牲にされてはならないという趣旨である。

（恐らく図らずも）佐々木の本書では、「ビーガン」の2つの用法が区別されている。丸括弧の中で「恐らく図らずも」と書いたのは、佐々木が2つの用法の違いに注意を促していないからである。「現代人が肉食をやめてビーガンを志す主な理由」に関して佐々木は、週刊誌『AERA』2020年3月20日号の記事を紹介して次のように述べる。

⁴ より正確には、同書を訳して解題を書いた井上太一に依拠して、と思われる。

①動物愛護、②自身の健康、③環境保護という3つの動機で、特に若い世代は環境保護への高い関心から、ビーガンに転じる人が多いのだという。(138頁)

この中で自身の健康や環境保護という動機からビーガンになった人は、動物愛護という動機を持っていないかもしれない。その場合のビーガンは、上で述べたビーガンの定義から外れる。そういう人と「動物の権利」思想からビーガンになった人との共通点は、肉・乳・卵を食べないということである。上で定義した「ビーガン」が脱搾取主義とすれば、こちらの「ビーガン」は純菜食主義または完全菜食主義である。別の言い方をすれば、純菜食主義者の中には、脱搾取主義の者もいれば、そうでない者もいる。そして佐々木によれば、脱搾取主義でないビーガンも脱搾取主義のビーガンも増えているということのようである。もちろん「動物の権利」運動の担い手は脱搾取主義のビーガンである。

以上のように佐々木は簡潔に「動物の権利」思想と「ビーガン」を説明する。それを一言で繰り返せば、動物には生命権や自由権があるので、人間は動物搾取を止めるべきだということである。そこでは、「ビーガン」という言葉が示唆するように、畜産が最大の問題である。

では、なぜ「イルカ漁をターゲットにするのか」(142頁)。この説明として佐々木は、森下丈二のカリスマ動物説を次のように紹介し説明する。

「クジラは、ゾウやトラ、オオカミ、サメなどと同様の『カリスマ動物』であり、基本的に人間が手を付けるべきではないという考え方である。……」／森下によれば、カリスマ動物の部類に入るのは基本的には大型脊椎動物で、子供もふくめて誰もが知っており、絶滅危惧種とされているといった特徴もあり、決して資源とみなされないのだという⁵ (143～144頁)

カリスマの概念は難しいけれども、要するに佐々木によれば、運動団体はイルカを「戦略的に」利用しているということのようである(147頁)。たしかに運動団体が戦略的に利用するのは、パンダであってもかまわないし、トラであってもゾウであってもウサギであっ

⁵ この引用で、前半部は森下からの引用である——つまり佐々木が森下を引用している。

てもかまわないだろう。もちろん、イルカであってもかまわない。

第2節 水産庁と和歌山県の見解

第4章の最後で佐々木は、すでに紹介した動物の権利思想に対置して、水産庁と和歌山県の見解を紹介する。佐々木は論点を5つに絞って、質問に答える形で水産庁と和歌山県の見解を紹介する。ただし、そのうち3つ目の論点「捕鯨は海の生態系にダメージを与えるのか？」はそれほど重要と思われないので、ここでは省略する。残る4つの論点を順々に見ていこう。1つ目の質問は、「太地町の人々にとって、捕鯨やイルカ漁とは何か？ どのような歴史があるのか？」というものである。ここで質問は2点、つまり歴史と現在の意味とである。歴史を佐々木は10行でまとめて紹介する。現在の意味について佐々木は次のように述べる。

太地町では現在も捕鯨が行われており、ミンククジラを主な捕獲対象とする捕鯨業のほかに、ゴンドウ類やイルカ類を捕獲対象とする鯨類追込網漁業などが営まれています。太地町では農地が少なく、海からの恵みを糧に生活をしてきた歴史があり、現在もその風土に根ざした生活様式は、大きくは変わっていません。(158頁)

しかし、この説明は漠然としていて、たいしてなにも分からない。この引用の1つ目の文は事実であるけれども、それにどういう意味があるのかが述べられていない。2つ目の文の前半部は歴史的事実であるけれども、後半部は事実かどうか疑わしい。例えば18世紀にはほとんどの就業者が農業か漁業に従事していたはずである。しかし現在では第1次産業に従事する人は就業者の中の7%余りであり、ほとんどの人は第2次産業か第3次産業に従事している⁶。したがって、捕鯨やイルカ漁の意味を問うとしたら、捕鯨やイルカ漁に従事している人にとって捕鯨やイルカ漁とは何か、ではないだろうか。例えば、いつ、どのようにして捕鯨やイルカ漁に従事するようになったのか、捕鯨やイルカ漁による収入は収入全体の何割くらいになるのか、等々。

⁶ 平成27年国勢調査 就業状態等基本集計 和歌山県太地町による。

2つ目の質問は、「現代人は、クジラを食べる人が減っている。クジラを食べることは、日本の食文化なのか？」というものである。これは事実を指摘し、その上で疑問を呈している。では鯨肉の消費はどうなっているのか。2022年度に鯨肉の国内生産量は約2千トンで、消費量も約2千トンであった⁷。これは国民1人1年当たりに換算すると約16グラムである。つまり1人が1年間に16グラム食べたという計算である。参考までに、牛肉の国民1人1年当たり消費量は6.2キログラム、豚肉は13.1キログラム、鶏肉は14.2キログラムで、魚介類は22キログラムであった。比較的身近な鶏肉の消費量と比べると、鯨肉の1人当たり消費量は鶏肉の約887分の1である。とはいえ質問は、「クジラを食べる量が減っている」というのではなく、「クジラを食べる人が減っている」というのであった。国民1人が1年間に16グラムの鯨肉を食べた計算になると言っても、鯨肉の消費には大きな偏りがある。なかには1人で10キログラムも20キログラムも食べる人がいるからである。その分、鯨肉をまったく食べない人も多いということになる。そこから、「クジラを食べることは、日本の食文化なのか」という疑問が出てくる。

この2つ目の質問に対して、水産庁や和歌山県の見解は、半分譲歩するように見える。佐々木は次のように紹介する。

1982年に採択された「商業捕鯨モラトリウム」の導入以降、日本における鯨肉の流通量が限られてきました。これにより、消費が多い地域以外ではクジラの流通が激減し、日本に鯨肉食文化があることに実感が持てない人々が増えてきたように思われます。(159頁)

「消費が多い地域」というのは具体的には「北海道、東北地方、和歌山県、高知県、九州北部など」(159頁)である。「日本の食文化なのか」という問いへの答えは、当然ながら「日本の食文化」という言葉の定義に依る。「日本の食文化」というと、日本のどこでもみんなが食べているという意味合いが強い。その意味では、鯨肉食は「日本の食文化」ではない。ただし「日本の食文化」は別の意味では、日本(のどこか)にある食文化という意味でもありうる。水産庁や和歌山県の見解は、「日本の食文化なのか」という問いには

⁷ 令和4年度食料需給表による。

直接答えないで、「日本に鯨肉食文化がある」というように意味をすり替えて答えているように思われる。実質的に「日本の食文化」でないということを認めて、日本における一定地域の食文化にすぎないことを認めるわけである。ここまで譲歩した上で、水産庁や和歌山県の見解は、地域の食文化を次のように「個人の自由」という論理で擁護する。

食文化においては、世界のそれぞれの地域や国の生活環境、自然環境、歴史などにも配慮し、持続的に利用できる十分な資源がある限りにおいて尊重されるべきであり、何を食いたいかは個人の自由です。(159 頁)

ここでは文化を尊重することが大前提であり、それを制約するのは資源の持続可能性だけである。資源の枯渇は、当事者にのみ影響する場合は、当事者がそれを甘受することができる。資源の枯渇が他人に影響する場合は他人の利益を侵害することになる。だから要するに他人に害を加えなければ、何をしようと個人の自由だという論理である。

2つ目の質問に関しては、質問者も水産庁や和歌山県も「現代人は、クジラを食べる人が減っている」ということを事実として受け入れているようである。しかし、それはそれほど明白ではない。昔、例えば 18 世紀に、何人の人が捕鯨に従事していたのか、1 年間に何頭のクジラを捕って、どのくらいの鯨肉を生産していたのか。それは当時の日本人 1 人あたりどの程度の消費量になったのか。そうした事実がよく分からないからである。ただし容易に想像できることはある。近代捕鯨とは違って、昔の捕鯨技術では、それほど多くのクジラを捕ることはできなかった。また魚でも、その消費は主に漁村周辺に限られていた。輸送手段や冷凍技術がなかったからである。クジラなら、なおのこと消費が限定的だったのではないだろうか。

3つ目の質問は、「世界の捕鯨はどうなっているのか？ 水族館でのイルカショーは見られなくなるのか？」というものである。ここには2つの問いがある——世界における捕鯨の状況と、水族館でのイルカショーである。捕鯨の状況について佐々木は水産庁や和歌山県の見解を次のように紹介する。

鯨類を含む野生動物を持続的に利用しようとする考え方は世界の多くの国が支持しているものであり、世界中の人々が捕鯨に反対しているという理解は正しく

ありません。／実際にノルウェー、アイスランドでも捕鯨が行われているほか、アメリカやロシアにおいても、先住民の生存に必要なものとして捕鯨を行うことが認められています。(160 頁)

たしかに世界においても日本においても、捕鯨に反対する人もいれば反対しない人もいる。必ずしも多数派が正しいということもない。しかし、先住民の生存に必要な場合とそれ以外の場合とは違うということには注意を促したほうがよいのではないだろうか。太地町で捕鯨に従事する人たちは先住民ではないからである。

イルカショーの問いについても、水産庁や和歌山県の見解は直接答えない。動物園・水族館の問題に少しづらせて答える和歌山県の見解を佐々木は次のように紹介する。

日本や世界の各地の動物が展示される動物園や水族館では、愛情のある飼育員の手によって動物は大事に育てられています。施設を訪れる人は、動物たちを身近に見て、生態を観察することができます。こうした経験をきっかけにして、野生動物のすばらしさを知り、動物や自然に興味を持ち、適切な保護に関心を持つようになった人々も少なくないでしょう。動物園や水族館は社会的にも教育的にも重要な役割を担っています。／加えて、現在の動物園や水族館は希少な生物を保護・繁殖させることで種の存続を図ったり、習性などを理解するための研究を行ったりといった学術的な使命も担っています。動物園や水族館による野生動物の展示を否定してしまうと、施設が担っている重要な役割までも排除されてしまうこととなります。(160～161 頁)

イルカショーの問いに、なぜ水産庁や和歌山県の見解は答えないのだろうか。実は、水産庁や和歌山県の資料——「水産庁 よくある質問 捕鯨問題一般」と「太地町でのイルカ漁業に対する和歌山県の公式見解」——には、イルカショーの問いがない。したがって、答えようがないのである。にもかかわらず佐々木がイルカショーの問いを立てたのは、水産庁や和歌山県の見解がイルカショーの問いに答えていないことを明確化するためであるのかもしれない。

代わりに和歌山県の見解は、一般的に動物園・水族館を、その効用に訴えて擁護する⁸。

⁸ イルカショーの問いに答えていないのは、水産庁の見解も和歌山県の見解も同じであるけれど

しかし、その擁護論の一步手前で、和歌山県の見解は、「愛情のある飼育員の手によって動物は大事に育てられています」と述べて、動物園・水族館を消極的に弁護している。ここには、動物を虐待しているわけではありませんという意味合いが込められている。問題は、「愛情のある飼育員の手によって動物は大事に育てられています」というのは事実かどうかである。それは「愛情のある」というのがどういうことか、「大事に育てられる」というのがどういうことかに依るだろう。飼育員は主観的には愛情をもって動物を大事に育てているかもしれない。しかし経営者は動物を客観的に劣悪な環境においているかもしれない。

さて、和歌山県が挙げる動物園・水族館の効用は4つである。第1に、「動物たちを身近に見て、生態を観察する」という教育的効用である。第2に、「こうした経験をきっかけにして、野生動物のすばらしさを知り、動物や自然に興味を持ち、適切な保護に関心を持つようになった人々も少なくない」という社会的効用である。第3に、「希少な生物を保護・繁殖させる」という種の存続効用である。第4に、「習性などを理解するための研究」を行うという学術的効用である。しかし、それだけでは、効用がないわけではないと言っているにすぎない。効用があるというだけではなくて、どれだけの効用があるかが重要である。また正の効用があるのであれば、負の効用も考慮に入れて、差し引き正の値になるのか負の値になるのかということも重要である。さらに、動物園・水族館に効用があるにしても、同じ効用が別の仕方でよりよく達成されるかどうかを考えることも必要だろう。例えば、生態を観察するという教育的効用は、檻の中の虎を檻の外から眺めるよりも、野生の虎を捉えた映像番組を見るほうがずっとよく達成されるのではないか。あるいは、「希少な生物を保護・繁殖させる」ことは動物園・水族館がなくても、例えば「保護・繁殖センター」でできるだろう。なによりも、こうした効用に訴える動物園・水族館擁護論は、大多数の国民にとって動物園・水族館が娯楽の場にすぎないという実態からかけ離れていると思われる⁹。こうした疑問点を私は直ぐに思いついてしまう。佐々木は、どう思っているのだろうか。

も、和歌山県の見解だけは動物園・水族館を擁護する。水産庁の見解には、動物園・水族館の擁護が含まれない。

⁹ 上野吉一は、「憩いの場」であると言う（「動物園動物の福祉」、136～137頁）。

最後の質問は、「クジラに限らず、動物を殺して食べることは許されるのか？ 私たちはどんなことに配慮すべきか？」というものである。この質問に対して、佐々木が紹介する見解は正面から答えているように思われる。ただし、この質問を取り上げて答えているのは和歌山県の見解だけである。水産庁の見解はない。その和歌山県の見解を佐々木は次のように紹介する。

人が生きていくためには、他の生き物の命を犠牲にしなければなりません。私たちは牧畜によって大切に育てた家畜を屠殺し、丹精込めて育てた野菜を収穫して、食料にします。(163 頁)

イルカは知性の高い動物ですが、牛や豚などの家畜にも感情や知性があり、これらすべての動物には、われわれと同じく生きる権利があります。しかし、われわれは他の動物の命を犠牲にしなければ生きていくことはできません。(163 頁)

ここには、驚くべきことが書いてある——「すべての動物には、われわれと同じく生きる権利が」あるというのである。この言い方をするとき、暗黙のうちに、植物には生きる権利がないということが含意されている。また他の動物の生きる権利が、われわれの生きる権利と同じだということである。そうであれば、われわれの生きる権利も他の動物の生きる権利も両方とも尊重する必要がある。しかし、佐々木は、われわれの生きる権利と他の動物の生きる権利とが両立しえないと考えるようである。上の引用の中の1つ目の文と最後の文は、和歌山県の資料では、もう少し慎重に書かれている。それを佐々木は書き換えている。

元の文と佐々木が書き換えた文とを比べてみよう。

1つ目の文

和歌山県 「人は皆、生きるために生き物の命を奪っています。」

佐々木 「人が生きていくためには、他の生き物の命を犠牲にしなければなりません。」

和歌山県の文は、現在の事実を述べているにすぎない。しかし佐々木の文は必然様相になっている。佐々木の文に比べて、和歌山県の文は、他の可能性、つまり現状の変更可能性を認めている。

最後の文

和歌山県 「肉を食べるために、我々はこれらの動物を殺さなければなりません。」

佐々木 「われわれは他の動物を犠牲にしなければ生きていくことはできません。」

和歌山県の文は、「肉を食べるため」という目的を立てた場合の条件文である。そこでは、肉を食べない場合には動物を殺さなくてもよいということが含意されている。和歌山県の文は、ごく単純な事実を述べている。それに対し、佐々木の文は、そういう条件なしに端的に「われわれは他の動物を犠牲にしなければ生きていくことはできません」と述べている。これは、われわれは他の動物を犠牲にしなくても生きていけるという事実と反する虚偽文である。こうして比べてみると、どうして佐々木は和歌山県の文を改悪したのだろうかという疑問が湧いてくる。

和歌山県の文のほうが正直である。和歌山県の文を引用しよう。

すべての動物には、我々と同じく生きる権利があります。しかし、肉を食べるために、我々はこれらの動物を殺さなければなりません¹⁰。

この2つの文から簡単に、動物の生きる権利を尊重するためには肉を食べるべきでないということが推論できる。そういう可能性を和歌山県は認めているわけである。

佐々木の文の中でも、1つ目の文と最後の文は、同じようでありながら若干の違いがある。1つ目の文では、「他の生き物の命を犠牲にしなければなりません」と述べられていて、例として野菜が挙げられる。しかし最後の文では、「他の動物を犠牲にしなければ生きていくことはできません」と述べられている。1つ目の文が真であるとしても、そこから最後の文は出てこない。たしかに私たちは動物か植物かなにかを食べないでは生きていけないが、動物を食べなくても生きていけるからである。

以上が、佐々木による水産庁や和歌山県の見解の紹介である。残念ながら佐々木の文章はそこで終わる。水産庁や和歌山県の見解に対して動物の権利派は、どう反論するのだろうか。その反論に対して水産庁や和歌山県は、どう応えるのだろうか。そして、動物の権利思想と水産庁や和歌山県の見解とどちらがより理に適っているのか。少なくとも佐々木はどちらに分があると考えるのか。こうした疑問が尽きない。けれども、本書にそうした

¹⁰ 「太地町でのイルカ漁業に対する和歌山県の公式見解」、10頁。

深い追求はない。その点が少し物足りないけれども、新書の入門的性格上、しかたがないのかもしれない。

第3節 イルカの知性

なぜ「イルカ漁をターゲットにするのか」についてはすでに述べたけれども、イルカに焦点が当てられるのには、戦略的だけではない理由もある。佐々木が述べるように、イルカは「知能も高く人間に愛嬌を見せる」からである（146頁）。イルカの知性について、本書の第5章を執筆したジェイ・アラバスターは、次のように述べる。

イルカの脳は大きく、1950年代から60年代にはたくさんの研究がされた。ジョン・C・リリー博士による研究はその代表例で、1967年に博士がイルカの知性について著した書籍『The Mind of the Dolphin: A Nonhuman Intelligence』（未邦訳、「イルカの精神：非人間的知性」の意）は、イルカのもつ優れた知性を世界に知らしめるきっかけとなった。人々は人間とイルカの交流に魅せられ、60年代の人気映画・テレビドラマ『わんぱくフリッパー』の制作につながる。以後、鯨とイルカの行動研究は続き、この賢く愛らしい海洋哺乳類動物は熱心な保護活動の対象となっている。（197～198頁）

この引用で最後の部分は、アメリカ合衆国の事情であるけれども、前半部は科学の話である。

2010年5月にはヘルシンキで「鯨類の権利——道徳的法的な変化の促進会議」が開かれ、その会議の成果として「鯨類の権利宣言——クジラとイルカ」が出された¹¹。この宣言を出したのは「ヘルシンキ・グループ（Helsinki Group）」と呼ばれる11人で、その内訳は、生物学者が4人、倫理学者が3人、活動家が3人、法学者が1人である。この宣言では、「科学研究によって、鯨類の心や社会や文化がいかに複雑であるかがより深く理解されるようになったことに鑑み」、「すべての鯨類には人格として、生命と自由と幸福への権利があると主張する」と述べられている¹²。

¹¹ The Helsinki Group, “Declaration of Rights for Cetaceans.”

¹² 訳は拙訳である。

なお、この宣言に関して、アラバスターは次のように述べる。

この宣言では、クジラとイルカは人間と同等の知能を持つゆえに、「非人間的な人」¹³として認められるべきであり（199 頁）

しかし「鯨類の権利宣言」では、「クジラとイルカは人間と同等の知能を持つ」とは述べられていない。

さらに 2012 年 2 月にバンクーバーで「鯨類の権利宣言——知性が倫理や政策にとって意味するもの」と題するシンポジウムが開かれた。このシンポジウムは、鯨類の知性に関する科学的事実を提示して、それが倫理や政策にとって何を意味するかを探るというものであった¹⁴。科学的事実とは一言で言うと、「クジラとイルカには高度な認知能力がある」ということであり、その倫理的・政策的含意も一言で言うと、「鯨類の権利宣言」であり、「鯨類には、生命と自由と幸福への権利がある」ということである。

だから、「イルカ漁をターゲットにする」ことについては、たしかにイルカがカリスマ動物ということもあるだろうけれども、それとは別の科学的根拠もある。科学的根拠ということ言えば、イルカを魚の同類として扱うことがそもそも科学的根拠を欠くと私には思われる。たしかに昔は人々がイルカを魚だと思っていたかもしれない。しかし、イルカが魚ではないということが科学的に分かれれば、イルカの扱いも魚とは違ってくるはずだろう。日本の法体系では、野生動物に関わるのは、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律であり、この法律が対象とするのは野生の鳥類と哺乳類である。イルカは野生の哺乳類であるにもかかわらず、なぜかこの法律によって保護されていない——それが大きな問題だと私には思われる。

それはとにかく、佐々木は反イルカ漁運動をイルカ神話と結びつけようとする。そうすると、反イルカ漁運動は非科学的だという印象を与える。しかし実際には、イルカの権利運動はなによりも科学的事実を拠り所としているのである。運動団体にとって、イルカは

¹³ 引用者（浅野）注 「非人間的な人」は、non-human person の訳と思われるが、訳として不適切であり、「人間以外的人格」または「ヒトでない人格」が適訳である。

¹⁴ Bird, “Declaration of Rights for Cetaceans: Ethical and Policy Implications of Intelligence.”

科学的根拠とカリスマ性と両方を備えていて都合がいいのだろう。

第4節 アメリカの動向——特に動物の権利訴訟について

第5章でアラバスターは、「動物の権利」運動をアメリカ合衆国における解放運動の流れの中に位置づけて紹介する。これはシンガー『動物の解放』以来の路線で、アラバスターはシンガーの言葉を引用して、次のように述べる。

「我々は黒人解放運動、同性愛者解放運動、その他様々な解放運動を目の当たりにしてきた。そして女性解放運動がその最終形だと思った者もいるだろう。」／しかし、と彼[シンガー]は続ける。¹⁵ (173 頁)

シンガー『動物の解放』から引用しよう。

解放運動は、私たちの道徳上の視野の拡大を要求する。¹⁶

だから女性解放運動の次には動物解放運動が来るのである。

この後、アラバスターは、「動物の倫理的扱いを求める人々の会 (People for the Ethical Treatment of Animals)」のことを紹介し、動物の権利運動と環境保護運動の違い、動物福祉と動物解放の違いを説明する。その途中でアラバスターは、反イルカ漁を、次のように述べて感情問題として規定する。

クジラを捕りたいという欲求も、クジラを捕るべきではないという考えも、どちらも感情に基づいている。(183 頁)

少し上で述べたように、鯨類の権利は科学的事実に基づいて主張されている。しかし、ア

¹⁵ 角括弧部分は、引用者(浅野)が補った。ちなみに、ここのシンガーの言葉は、「動物の解放 (Animal Liberation)」と題する書評(1973年)の冒頭部分であるけれども、なぜか冒頭部分が Peter Singer, *Why Vegan* では割愛されている。したがって、*Why Vegan* の邦訳である『なぜヴィーガンか?』にも訳されていない。

¹⁶ シンガー『動物の解放 改訂版』、15頁。

アラバスターによれば、その科学的事実にどういう倫理的意味を認めるかは、鯨類に共感するかどうかによって決まるので、最終的には感情問題だということだろうか。

アラバスターの第5章で興味深いのは、動物の権利訴訟である。特に、「ノンヒューマン・ライツ・プロジェクト (Nonhuman Rights Project)」という団体の活動が注目に値する。この団体は、スティーヴン・M・ワイズが始めたもので、人間以外の動物に法的権利を得させようとする市民権運動の団体である¹⁷。この目的のためにノンヒューマン・ライツ・プロジェクトは、「ヘイビアス・コーパス (Habeas Corpus)」と呼ばれる法的技術を活用する。この「ヘイビアス・コーパス」は「人身保護令状」と訳されるけれども「身柄提出令状」とも訳される。これは英米のコモン・ローの下での技術で、日本では馴染みがないので、詳しく説明してもらいたいところである¹⁸。「ヘイビアス・コーパス」を私が説明すると、拘束の合法性を審理するために、拘束されている者を裁判所に連れてこさせるものである。したがって、拘束の不当性が証明される以前に、拘束されている者を実質的に拘束から救い出すことができる。

これの有名な先例は、イングランドであったサマセット対スチュワート事件 (1772年) である。当時、逃亡奴隷のサマセットは、所有者のスチュワートによって捕えられ、ジャマイカに売り飛ばされようとしていた。そのとき、サマセットの代父と代母が、王座裁判所に身柄提出令状の申し立てを行い、サマセットの身柄は裁判所に移された。裁判所は拘束の合法性を審理し、裁判長マンズフィールド卿は、奴隷制が合法ではなくサマセットが解放されるべきという判決を下した。この判例にどういう意義があるかと言うと、法的に **person** でなかった者を法的な **person** に変えたということである。どうしてそういうことが可能になるかと言うと、法的な **person** は、生物学的なヒトと同じではないからである¹⁹。昔は、そのことが明瞭であった。女性や子供は法的な **person** でなかったからである。もちろん今は、すべてのヒトが法的な **person** である。そのことでかえって、法的な **person** と生物学的なヒトが同じではないことが見えにくくなっているかもしれない。しかし現代でも、生物学的なヒトでない法的な **person** は、身近にある。特定非営利活動法人から株式

¹⁷ ワイズに関しては、日本語で読める論文として「動物の権利、一步ずつ着実に」を参照。

¹⁸ とはいえ、新書であることを考えると、アラバスターの説明で十分かもしれない。

¹⁹ この点をアラバスターは「会員クラブ」という比喻を使って説明する。

会社まで、ありとあらゆる法人が、生物学的なヒトではないけれども法的な person である。

ノンヒューマン・ライツ・プロジェクトは、この法的技法を人間以外の動物の場合にも活用しようとする。それは、裁判所が、法的な person でなかった奴隷を法的な person に変えてくれたように、法的な person でない動物を法的な person に変えてくれることを狙ってのことである。実際にノンヒューマン・ライツ・プロジェクトは 2013 年に「トミー (Tommy)」と「キコ (Kiko)」というチンパンジーのために訴訟を起こした。それについてアラバスターは次のように紹介する。

2013年、NhRP[ノンヒューマン・ライツ・プロジェクト]はこの2匹の代理としてニューヨーク州で訴訟を起こし、2匹が「人間」²⁰として人身保護を受け、自然保護区(サンクチュアリ)に移されるべきだと主張した。どちらも退けられたが、判事は同情的なコメントも残している。団体は著名な研究者の支援を得て次々と上訴したものの、最終的に州最高裁²¹で人身保護令は人間にのみ適用されるものだとして棄却された。／……2018年にニューヨーク州最高裁は本件に関する最終的な判決を下したが、判事の1人が判決とともに意見書を出すという異例の結末を迎える。ユージン・M・ファヘイ裁判官が、意見書の中で将来的にはチンパンジーの人身保護令が認められる可能性があることを述べたのだ²²。／……ファヘイ裁判官は、チンパンジーのような動物が「人間」²³として扱われるべきか、あるいは所有物、つまりモノとして扱われるべきかは、将来的にいずれ審理されるべき課題である」と述べた。そして、将来の審理に向けて自身の考えをこう述べている。

「私の考えでは、本件は、チンパンジーが人間の定義に当てはまるか、あるいはチンパンジーが人間同等の権利や義務を有するかを問うよりも、チンパンジーが人身保護令によって保護されるべき固有の自由権を有するかを問うことで、より有意義な審理ができる。これは道徳的・法的地位の問題だ。さらに、この問いに

²⁰ 引用者(浅野)注 チンパンジーは人間ではないので、ここは「人間」ではなく「人格」と訳すのが適切である。

²¹ 引用者(浅野)注 「最高上訴裁判所」という訳もある。

²² 引用者(浅野)注 ファヘイの意見は、State of New York Court of Appeals, “Motion No. 2018-268”で読むことができる。

²³ 引用者(浅野)注 ここも同様に、「人間」よりも「人格」のほうが適切である。

対する答えは、種としてのチンパンジーの本質的な性質に対し、私たちがどう評価するかによって決まるのである」(195～196 頁)

さらに続けてアラバスターは次のように述べる。

その後も、NhRP[ノンヒューマン・ライツ・プロジェクト]は別の2匹のチンパンジーおよび4頭のゾウの代理人として訴訟を起こしている。うち2件では人身保護令を勝ち取り、所有者になぜ動物を「監禁」しているのか、説明を命じる判決が下った。²⁴ (196 頁)

ここで「別の2匹のチンパンジー」というのは、ハーキュリース (Hercules) とリオ (Leo) のことと思われ、「うち2件で」というのもハーキュリースとリオの件と思われる。しかし、その2件について「人身保護令を勝ち取り、所有者になぜ動物を「監禁」しているのか、説明を命じる判決が下った」というのは不正確である。たしかに当初(2015年4月20日) そのように思われる展開になり²⁵、そのように報道されたけれども、それを裁判所はすぐに(2015年4月21日)訂正したので²⁶、実際には「人身保護令を勝ち取」ったわけではなく、訴えは退けられた²⁷。

上の引用で「4頭のゾウ」というのは、ビューラ (Beulah) とカレン (Karen) とミニー (Minnie) の3頭およびハッピー (Happy) のことと思われる。このうち、ビューラとカレンとミニーに関しては、訴えが退けられた。ハッピーについて、アラバスターが執筆した時点では「訴訟が続いている」(196 頁)とだけ書いてあるけれども、その後の展開を記しておく。2022年6月14日、ニューヨーク州最高裁は、ノンヒューマン・ライツ・プロジェクトの訴えを退けたけれども、このときの裁判官の判断は5対2であった。つまり、5人が多数派で訴えを退けたけれども、2人が棄却に反対した。2018年の判決でファへ

²⁴ ここでも角括弧部分は、引用者(浅野)が補った。

²⁵ Supreme Court of the State of New York, “Order to Show Cause & Writ of Habeas Corpus.” Kiem, “Chimpanzees Take a Huge Step Toward (Some) Human Rights”も参照。

²⁶ Supreme Court of the State of New York, “Amended Order to Show Cause.” Calamur, “N.Y. Judge Amends Habeas Corpus Order For Chimps”も参照。

²⁷ Supreme Court of the State of New York, “Decision and Order.”

イ裁判官は控えめに意見を述べていた。それに比べて今回 2022 年の判決では 2 人の裁判官ローワン・D・ウィルソンとジェニー・リベラが多数派の意見に強く反対した。

例えばウィルソン裁判官は次のように述べる。

[ハッピーは]監禁によって大きな苦痛を被っているし、監禁は、たしかにどの実定法も犯していないけれども、ほとんどなんの社会的便益も生み出していない²⁸。たとえハッピーが奴隷であったとしても——現実には奴隷でないのだけれども——身柄提出令は、奴隷とされた生き物の監禁問題に対処するために使われうる。ハッピーが動物であることは、法がハッピーに権利を付与する妨げにならない。実定法がすでにハッピーにいくらかの権利を与えていることは、身柄提出令の制限にならない。実定法によって動物園がハッピーを管理していることも、身柄提出令の制限にならない。ハッピーが解放されえず、より適切な保護環境への移転が必要だということも、身柄提出令を利用できなくするようなものではない²⁹。ハッピーが提出した証拠が示すように、ハッピーには非常に顕著な認知的、情緒的、社会的な必要性と能力とがあり、そうした特質とハッピーの具体的な監禁状況とが相まって、差し当たり、ハッピーの現在の監禁が不正だという主張が確立される³⁰。

自由を求めるハッピーの権利を認めるべきである——それは、たんにハッピーが野生動物であり、檻に入れて展示するためのものではないからというだけではなくて、私たちがどのように他者に権利を付与するかによって、私たちの社会がどのような社会であるかが決まるからである³¹。

リベラ裁判官も次のように述べる。

ハッピーは、物理的に自由でないとしても自律的な存在である。法には、この本質的に有害な監禁に異議を唱える方法があり、ハッピーは、身柄提出令によりしかるべき救済を求めて手に入れる機会を奪われるべきでない。したがって私は、

²⁸ State of New York Court of Appeals, “June 14, 2022 Decision No. 52,” Wilson’s Dissenting Opinion, p.

3. 角括弧部分は、引用者（浅野）が補った。

²⁹ Ibid., p. 69.

³⁰ Ibid., pp. 69-70.

³¹ Ibid., p. 70.

多数派意見に反対する³²。

ハッピーの監禁は、本質的に不正であり、非人道的である。それは文明社会への侮辱であって、ハッピーが監禁されて人間の見せ物になっている限り、私たちの人間性も貶められているのである³³。

この2人の意見は、動物の権利運動にとって大きな意義があると思われる。

他にアラバスターは、2012年に動物の倫理的扱いを求める人々の会（PETA）がシャチの代理人として起こした訴訟（201頁）なども紹介している。

立法についてもアラバスターは次のように簡潔に紹介する。

2016年には、カリフォルニア州がシャチの繁殖や州外からの搬入を禁止する法令を施行したことで、実質的に水族館では新しいシャチを飼育することができなくなった。……／……シャチやイルカの飼育を廃止しようとする運動は徐々に拡大している。現在ではカナダ、インド、トルコといった多くの国がシャチやイルカの飼育を廃止している。（202～203頁）

そしてアラバスターは第5章を次のように締めくくる。

動物の権利運動は今、その過渡期にある。……動物の権利運動とは、これまで人間のみが入ることができた「解放クラブ」に、動物を入会させようとする運動であり、人間社会と動物との関わりに変化を起こそうとする試みなのである。（203頁）

第5節 女性への注目

本書には、気になる特徴がある。佐々木は、「動物の権利」運動を担っているのが主に女性であることを執拗に強調する。拾ってみよう。

[「生物調査局（LIA）」が発信する]土曜朝の「Perfect Blue Cove Day」には、すぐさまインスタグラムのメッセージ欄に多くの言葉や絵文字が寄せられた。／…

³² Ibid., Rivera's Dissenting Opinion, p. 3.

³³ Ibid., p. 21.

…／支持したユーザーの性別は圧倒的に女性が多い。³⁴(31 頁)

和歌山県太地町の反イルカ漁キャンペーンに集まる抗議者たちの半数以上は女性ではないか、との指摘は以前から町内の関係者でもささやかれていた。……／……実際に町内での抗議デモを取材すると、女性たちが圧倒的に多いことがわかる。(104 頁)

2009 年公開の『The Cove』以降、これだけ[50 人ほど]の抗議者や活動家が一堂に太地町に集まるのは記憶にない。そして全員が日本人であり、やはり女性の参加者が過半数を占めるのも特徴である。(106～107 頁)

ビーガンに女性が多いことは、国内外の調査結果に表れている。／アメリカ、イギリス、オーストラリアなど英語圏で広く読まれているビーガン専門サイト『Vomad』は、2018 年 10～12 月、ビーガニズムについての世論調査を行った。……／男女別は女性が 81.9%で圧倒的に多かった。³⁵ (113 頁)

たしかに動物の権利運動の参加者に女性が多いというのは事実である。しかし佐々木は、どうしてその事実を執拗に強調するのだろうか。そのことにどういう意味があるのだろうか。

本書の中で、動物の権利運動に女性が多いということは、動物の権利運動の感情性、非科学性と並置される。例えば佐々木は次のように述べる。

中継ライブに寄せられるメッセージを見ると、多くのユーザーがイルカを擬人化して、感情的になっているのがわかる。反捕鯨、反イルカ漁運動は「科学的議論より感情論」「理屈ではなくイメージ先行」と言われる。イルカは大きな脳を持っていて賢い。仲間と共同生活を営んでおり、イルカ語を話して、複雑な感情を持っている——。1970 年代から、科学的な根拠が示されぬままこうしたイメージが大衆文化に浸透し、21 世紀の今も、太地町反イルカ漁キャンペーンにつながっている。(39 頁)

このライブ[イルカ漁のライブ配信]の常連視聴者たちはもう、漁師たちの暮らしや気持ちなど一切、歯牙にもかけなくなっている。入り江に追い込まれようとするイルカたちを憐れみ、「なんとか逃げて」と訴えている。やはり、イルカの方に主観を入れて、感情的になって言葉をつづっている。(54 頁)

³⁴ 角括弧部分は、引用者(浅野)が補った。

³⁵ 他にも同様の記述が、35 頁、40 頁、105 頁、120～121 頁、152～153 頁にも見られる。

87 件ついたコメント欄にはこんなメッセージが寄せられた。

[サユが]子育てに一段落が付き、捨て犬や捨て猫の保護活動に入ったのも、人間の勝手に振り回される動物たちを放っておけないと思ったからだ。活動しているうちに同じ考え方を持つ、動物思いの女性たちに出会うようになった。

「私の仲間は、とにかく弱いものいじめが大嫌い。動物が人間に閉じ込められている状況を見ると、解放するべきだという気持ちが強くわいてくる。理屈ではなく感情から参加する人が多いのも、女性特有の現象だと思う」（120 頁）

反イルカ漁キャンペーンは「イルカは賢い」「イルカ語を話す」などとする非科学的な「イルカ神話」に立脚するところも多く、太地町での抗議活動はそうしたグループの象徴的な存在である団体の「ドルフィン・プロジェクト」によって主導されてきた経緯がある。³⁶（131 頁）

特に動物の権利運動ないし反イルカ漁運動の非科学性について、佐々木は「イルカ神話の解体あるいは脱構築」という節で、次のようにイルカ研究者ジャスティン・グレッグの言葉を引用する。

「動物の権利擁護者の多くは、イルカも含めたほとんどの動物が、倫理的扱いを受けるに足るだけの『意識を持つ』ことは当たり前だと考えている。そのため、動物の自己覚知や意識をどう定義し、どう確認するか、科学的な論争までは踏み込まないことが多い（気にかけてさえいない場合もある）」（146 頁）

そして佐々木自身次のように述べる。

確かに、反イルカ漁キャンペーンの SNS にコメントを寄せる支持者たちの言葉を見ると、グレッグの指摘は腑に落ちる。彼らは科学的知見とは関係なく、動物の苦痛や死を取り除くことだけに主眼を置いており、イルカは決して殺されてはならない、と訴えている。（146 頁）

このように、動物の権利運動に女性が多いことが、動物の権利運動の感情性や非科学性とともに述べられたとき、どういう効果があるだろうか。佐々木は明言しないけれども、「動物の権利運動は、女性が感情で行なっている非科学的なものだ」という

³⁶ 他にも類似の記述が、63～64 頁、107 頁、112 頁、119 頁にも見られる。

ような言外の意味になり、動物の権利運動を貶める効果があると思われる。もちろん解釈によっては、科学では真実分らず、感受性の高い女性を中心になって行なっている動物の権利運動は人間に真実を伝える素晴らしい運動だという意味合いだと理解することも可能かもしれない。しかし、普通に読めば、動物の権利運動を貶める印象を与える。

実際のところ、イルカの認知能力はどうか。イルカの認知能力が高いというのは神話なのか。この点について佐々木は次のように述べる。

グレッグは数々の最新研究の分析を挙げて、地球上に生息するあらゆる動物の中で、洗練された社会的行動をとったり、驚くべき認知能力を持っていたりするのは、イルカだけではないと主張している。……／動物の生態に関する最新研究は、多くの生き物が、優れた認知能力があることを示している。イルカも確かに高い認知能力を持っている（145 頁）

だから結局、イルカには高い認知能力がある。イルカの認知能力が高いというのは神話でないのである。「イルカ神話の解体」というのは、イルカだけが高度な認知能力を持っているという神話の「だけ」という部分を否定するのであり、その理由は他の動物も高度な認知能力を持っているということである。したがって、イルカの認知能力が高いということは神話ではなく、解体されない。その意味では、動物の権利運動が非科学的だということのほうが神話にすぎないのである。

どうして動物の権利運動には女性が多いのかという問いに関して佐々木は、次のようにエミリー・ガーダーの考察を紹介する。

[ガーダーが]2006年に著した「動物の権利におけるジェンダー・クエスチョン：なぜ女性が大多数なのか？」のレポートにもこんなくだりがある。／ガーダーが引用した先行研究によれば、「動物の権利運動の参加者は68～80%が女性」（Jasper and Poulsen 1995; Lowe and Ginsberg 2002）だという。また、参加者は「年齢や政治的見解、教育レベルに関係なく、女性の方が男性よりも動物の擁護者の可能性が高い」（Kruse 1999）という。³⁷（121 頁）

ここで「動物の権利運動の参加者は68～80%が女性」は、ガーダーが引用しているのでは

³⁷ 角括弧部分は、引用者（浅野）が補った。

ない。佐々木がガーダーを引用しているのである。だから正確には、「ガーダーが引用した先行研究」ではなく、「ガーダーが参照した先行研究」または「ガーダーが依拠した先行研究」と書くべきである。また佐々木がガーダーから引用する文は「動物」で始まり「女性」で終わる。鉤括弧の後の丸括弧部分は引用の外にあり、佐々木の文章になる。ところが、「Jasper and Poulsen 1995; Lowe and Ginsberg 2002」と書かれても、これら2つの文献の書誌情報がまったくないので、読者は途方にくれる。同様のことは、「年齢や政治的見解、教育レベルに関係なく、女性の方が男性よりも動物の擁護者の可能性が高い」についても言える。この引用は、Kruseからの引用でもなければ、ガーダーがKruseを引用しているのでもない。佐々木がガーダーを引用しているのである。Kruse 1999の書誌情報がない点もすぐ上と同じである。

次いで佐々木は、どうして動物の権利運動には女性が多いのかという問いに対してガーダーが挙げる5つの説明を紹介する。

- ① ジェンダー化した経済構造：「屋外で働く女性が少なく、(女性の方が)動物の諸問題に多くのエネルギーを費やすことができる」
- ② リクルートネットワーク：「女性は、動物の福祉の組織から動物の権利運動にリクルートされている」
- ③ 広くシェアされている不平等さへの共感：「女性は動物が苦しんでいる状態を(人間が受ける)虐待や抑圧と関連付けている」
- ④ 社会的学習による説明：「感情的な表現と思いやりは、男性よりも女性の方が受け入れやすい」
- ⑤ 生物学的理論：「女性は生まれつき子育てをする人であり、自らの本能に従っている」

これら5つの説明は興味深い。ただし、「屋外で働く女性が少な」と、どうして「(女性の方が)動物の諸問題に多くのエネルギーを費やすことができる」ようになるのだろうか。男性でも屋外で働く人は少ないだろう。そうであれば、男性も、動物の諸問題に多くのエネルギーを費やすことができるのだろうか。そうではない。「屋外で」の訳が間違ってい

るのである。英語の原文は、**outside the home** である³⁸。この意味は、「屋外で」ではなくて、「自宅外で」ということである。ちなみに、ここの **work outside the home** は少し後の言い換えでは、**be employed full time** となっている³⁹。つまり「パートではなく週 40 時間以上誰かに雇用されている」という意味である。3つ目の説明も、訳が不正確と思われる。「広くシェアされている不平等さへの共感」の原文は、**empathy based on shared inequalities** である⁴⁰。だから正確には、「不平等さへの共感」ではなくて、「不平等さに基づいた共感」である。また「女性は動物が苦しんでいる状態を（人間が受ける）虐待や抑圧と関連付けている」の原文は、**women relate to the abuse and oppression that animals suffer** である⁴¹。ここで **that** は目的格の関係代名詞であり、**suffer** は他動詞であり、**abuse and oppression** は関係代名詞の先行詞である。**relate to A** は、「A を自分のことのように感じる」という意味である。直訳すれば、「女性は、動物が被る虐待や抑圧を自分のことのように感じる」となる。この文は、少し後の言い換えでは、**women identify with the oppression of animals based on similar experiences of objectification, subordination, and/or abuse** となっている⁴²。噛み砕いて訳せば、「女性は、自分自身がモノとして扱われ、従属させられ、虐待された経験があるので、動物の抑圧にも（我がことのように）共感する」というような意味である。

第6節 細々とした点

佐々木の問題関心は偏っている。本書の題名は『「動物の権利」運動の正体』である。「正体」という言葉には、正体を知られては困る者たちの正体を暴くというような意味合いがある⁴³。しかし、「動物の権利」の運動団体は、正体を知られて困るような団体ではない。自分たちが何者であり、どういう理由からどういう主張をするのかを積極的に情報発信している。ネット上のホームページ等で情報発信しているだけではない。路上に出て、

³⁸ Gaarder, “The ‘Gender’ Question of Animal Rights,” p. 2.

³⁹ Ibid., p. 3.

⁴⁰ Ibid., p. 2.

⁴¹ Ibid., p. 2.

⁴² Ibid., p. 5.

⁴³ 佐々木のこれまでの2著が『シー・シェパードの正体』、『恐怖の環境テロリスト』であったことにも注意。

街宣活動を行っている。「動物の権利」の運動団体は、自分たちの意見をできるだけ多くの人に知ってもらいたいのである。このことは、佐々木も分かっている。例えば佐々木は次のように述べる。

ここまで詳細にレンたちの資金源や活動の実態を外部の者がレポートしたのは初めてだ。警戒する警察や漁師たちにとって、対策強化のために得られる情報も多いだろう。／しかし、レンが惜しみなく披露したのは、自分たちの活動も違法行為ではなく、多くの支持者がバックについていると確信しているからだ。レンは「太地での活動自体がオープンにならないと、われわれの問題意識は社会に広がっていかない。堂々と活動し、堂々と問題点を訴えていくことが重要だと考えている」とも語る。(50～51 頁)

ここで「レン」と呼ばれるのは、「生物調査局 (LIA)」の代表者ヤブキレンのことである。にもかかわらず、『「動物の権利」運動の正体』という題名は、「動物の権利」運動を行う者たちが正体を知られては困るような、いかがわしい輩であるかのような印象を与える。むしろ本書の題名は、『「動物の権利」運動とは何か』もしくは『「動物の権利」運動の現在形』とでもしたほうが良かったのではないか。

また佐々木は次のように述べる。

太地町内でこの日本人活動家と一緒に行動を共にする仲間に密着取材し、物語の主人公にした。(7 頁)

「この日本人活動家」というのは、すでに紹介したヤブキレンのことである。「物語の主人公」というのは、本書の主人公という意味である。つまり佐々木が本書の主人公にするのは、「生物調査局 (LIA)」という「動物の権利」運動団体である。ただし、そうすることで、「動物の権利」運動を担う他の多くの団体や個人が度外視されている。また佐々木が密着取材するのは太地町内での活動なので、本書の主人公になるのは実質的に反イルカ漁運動である。そうした点で、本書は「動物の権利」運動の全体像を伝えていない。「動物の権利」運動にとって、本丸は畜産であり、イルカ漁は周辺に位置する小さな問題にすぎない。たしかに畜産のこと (65～66 頁、142 頁) も競馬のこと (68～73 頁) も野生動物

のこと（83～87頁）も伴侶動物のこと（120頁、127頁）も本書の中で触れられてはいる。しかし本書のほとんどはイルカ漁の話である。その意味で本書の題名は、『反イルカ漁運動とは何か』ないしは『反イルカ漁運動の現在形』とでもしたほうが良かったのではないか。

本書の物語は、2021年1月「1頭のミンククジラが太地沖の定置網にかかり、網の外に出られなくなってしまった」（3頁）出来事から始まる。この「混獲」に関して佐々木は次のように述べる。

意図せず、捕獲する対象ではない魚やクジラが網にかかった場合、「混獲（by-catch）」として資源の有効活用が認められている。（4頁）

混獲自体が問題ではない（5頁）

合法的に認められている「混獲」（6～7頁）

定置網に入った「混獲」（※条件付きで資源の有効活用が認められている）のミンククジラ（43頁）

このように解釈することも可能かもしれないけれども、やはり不正確であり読者に誤解を与える。水産庁の資料から引用しよう。

クジラは、捕鯨業以外では、原則として、捕獲が禁止されています。したがって、刺し網などで混獲を発見した場合には、捕獲禁止の違反とならないように、船上に引き揚げたり、持ち帰ったりせず、直ちに海へ戻してください。

定置網にクジラが入ったときは、……原則として、入網したクジラを逃がす努力をお願いします。ただし、人命の危険を冒して、あるいは、漁具を大幅に破損してまで、無理をして逃がす必要はありません。漁業の許可及び取締り等に関する省令の規定では、ひげ鯨等は混獲の報告、DNAの分析などを行うことを条件として、その資源の有効利用ができることになっています。／ただし、これは、積極的に利用しなければならないということではなく、状況に応じて漁業者の判断で処理すればよいということで、これまでの逃がす努力の変更を求めるものではありません。なお、特にミンククジラについては、現在、捕鯨業の対象となっており、捕獲枠も設定されていますので、安全面に配慮しながら、解放することが

できないか可能な範囲でご検討ください。⁴⁴

2つ目の引用で「ひげ鯨」というのには、ミンククジラが含まれる。水産庁の資料は、質問に答えるという形をとっているので優しい言葉で書かれているけれども、趣旨は明らかである。つまり、ミンククジラを逃がすのが原則であって、捕獲して利用することは例外として認められるに過ぎない。佐々木の書き振りは、一定の条件を満たせばミンククジラを自由に利用してよいかのような印象を与える。しかし、そうではない。水産庁の資料は、なんとかミンククジラを解放することができないか、努力するように念を押している。

佐々木の「混獲自体が問題ではない」という言葉も、少し問題である。恐らくこの文は「やむを得ない場合の混獲は許される」という趣旨だろうけれども、最初から混獲が問題でないかのような印象を与える。現実には、混獲自体が問題であり、水産庁は混獲を減らすよう対策に取り組んでいる。

混獲について佐々木は、さらに次のように述べる。

一部の種の個体数が激減しているクジラの混獲には厳格なルールが決められている。原則として入網したクジラは逃がす努力を漁師たちに求めているが、「人命の危険を犯して、あるいは漁具を大幅に破損してまで、無理して逃がす必要はない」とし、行政に混獲したことと個体のDNA分析を義務付けることを条件に、捕獲して、その鯨肉を販売することを許可している。正規の捕鯨と同様に厳しく個体管理が行われて、偶然の混獲を装ってクジラをとらえることがないよう、**徹底した管理がなされている。**／もちろん、太地町でもその規則を守っており、そうした偽装捕鯨は行われていない。⁴⁵ (89頁)

しかし同時に佐々木は、上の文章と矛盾するように見える、次のようなことを述べる。

定置網に入った魚やクジラ、ウミガメなどの処理はすべて**行政の管理が徹底されているのではなく、漁師たち自身の報告にまかされている側面が否めない**⁴⁶

⁴⁴ 「鯨類の座礁・混獲」、1頁。ただし、丸括弧部分は省略した。

⁴⁵ 太字による強調は、引用者（浅野）が加えた。

⁴⁶ ここでも太字による強調は、引用者（浅野）が加えた。

この関連で佐々木は次のようにも述べる。

もし、この告発手法[ドローンによる空中からの撮影]が今後も許されるのであれば、反捕鯨、反イルカ漁のキャンペーンの余波は太地町だけでなく全国に広がり、混獲の状況が監視され、その実態が透明化されていく可能性がある。……／捕鯨やイルカ漁の漁師たちにすれば、反対キャンペーンは数十年続けられてきたことであり、もう慣れきってしまっているが、「ブーン」というドローンの飛行音とその後 SNS で公開される鮮明な動画や写真は、活動家への警戒心を引き起こす。⁴⁷ (43～44 頁)

これも筆致の問題かもしれないけれども、佐々木の文章は「この告発手法が今後も許され」「混獲の状況が監視され、その実態が透明化され」ることが好ましくない可能性だという印象を与える。しかし、レンが代表を務める「生物調査局 (LIA)」が行うのは、日本の法律や規則に基づいて違反者を告発することである。法律や規則を遵守する捕鯨やイルカ漁の漁師たちは、水産庁の職員がいつ抜き打ちで視察に来ても困らないはずであるし、もし水産庁に余裕があれば水産庁の職員が 24 時間常駐して監視していたとしても困らないはずである。

ときに佐々木の論述は矛盾しているように見える。例えば佐々木は一方で次のように述べる。

レンは住民票を太地町に移してまで、この監視活動に携わっている。他の活動に従事するため、町を離れることはあるが、どこからか給料が出ているのではない。質素に暮らし、イルカの不幸を嘆く仲間たちの思いを背負い、ストイックな使命感が自分たちの行動を支えている。(38 頁)

支援者は圧倒的に日本人が多い。「95%が日本人です」とレン。反対運動が資金的にも日本人に支えられていることは目を引く。(46 頁)

⁴⁷ ただし角括弧部分は、引用者（浅野）が補った。

しかし他方で佐々木は次のようにも述べる。

ヤブキはこうした状況に加え、費用の掛かる訴訟を海外の団体の支援を受けて行なったり、告発状を作成したりしており、「かつてないタイプの日本人活動家だ」と指摘する。(156 頁)

ヤブキとレンは同一人物なので、これら2つの文章は、ヤブキレンの資金源に関して（厳密に矛盾しているのではないかもしれないけれども）矛盾する印象を与える。ただし、2つ目の文章の主動詞「指摘する」の主語は、「ヤブキ」ではなく、この文章の前の文章に出てくる「岩谷」であると思われる。そうとすれば、2つ目の文章は、佐々木が岩谷の考えを紹介しているだけで、佐々木が自己矛盾しているのではないかもしれない。しかしそれでも佐々木は矛盾したことを語っているように見える。岩谷の考えを取り上げて紹介するのは、佐々木だからである。

佐々木は、イルカ追い込み漁について次のように述べる。

太地町は400年前の江戸時代から続く「古式捕鯨発祥の」。時代が変わっても「くじらの町」の伝統的な風景は変わらず、漁師たちは今も捕鯨やイルカ漁の営みを続けている。(22 頁)

太地町の漁師たちが継承してきたイルカ漁の「カンカンカン」という音はこの時期の町の風物詩だ。(52 頁)

この叙述は誤解を招く。太地町で「カンカンカン」という音を鳴らす追い込み漁を始めたのは、1970年代である⁴⁸。つまり、「カンカンカン」という音を鳴らす追い込み漁は昔から継承してきたものではない。にもかかわらず佐々木の文章は、「カンカンカン」という音を鳴らす追い込み漁が昔から継承されてきた伝統であるかのような印象を与える。

まとめ

⁴⁸ このときの経緯は、伴野『イルカ漁は残酷か』第3章が詳しい。また目黒『イルカ・クジラ解放』は、イルカ漁全体について非常に詳しい。

ここまで、さまざまな批判的なことを長々と述べてきた。けれども、本書の功績は、あまり知られていなかった「動物の権利」運動と「動物の権利」思想を一般に紹介したことにある。これまで「動物の権利」運動に関わってきた人には、自分たちの考えがどうして伝わらないのだろうか、というもどかしさがあった。佐々木の本書は、これまでよりも広い範囲の人たちに「動物の権利」思想を伝えてくれるのではないだろうか。特に前半のレンとサユの生き様の描写はいきいきとしていて、読みやすい。

たしかに「動物の権利」思想をいくらか知っている人にとっては、本書が「動物の権利」思想と水産庁や和歌山県の見解との対決をそれ以上考察していない点が物足りなく感じられるだろう。しかし、アメリカにおける最近の動向は興味深いだろう。特にノンヒューマン・ライツ・プロジェクトによる動物の権利訴訟は非常に興味深い。私もこの書評を執筆する過程で、2022年6月14日のニューヨーク州最高裁判決について調べ、大いに勉強させてもらった。感謝したい。

参考文献

- 青木洋英、「動物園のゾウのための人身保護請求の可否——Nonhuman Rights Project, Inc. v. Breheny, 2022 WL 2122151 (N. Y. 2022)」、『沖繩法政研究』第25号（2023年）、95～139頁。
- 上野吉一、「動物園動物の福祉」、上野・武田編著『動物福祉の現在』、135～154頁に所収。
- 上野吉一・武田庄平編著、『動物福祉の現在——動物とのより良い関係を築くために』、農林統計出版、2015年。
- 佐々木正明、『シー・シェパードの正体』、扶桑社新書、2010年。
- 、『恐怖の環境テロリスト』、新潮新書、2012年。
- 、『「動物の権利」運動の正体』、PHP新書、2022年。
- キャス・R・サンスティン／マーサ・C・ヌスバウム編、『動物の権利』安部／山本／大林監訳、尚学社、2013年。
- ピーター・シンガー、『動物の解放 改訂版』戸田清訳、人文書院、2011年。
- 、『なぜヴィーガンか』児玉聡＋林和雄訳、晶文社、2023年。
- 水産庁、「鯨類の座礁・混獲」。 <https://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/attach/pdf/bycatch-15.pdf>
- 高橋有紀、「若者の「ゆるヴィーガン」 100%を目指さず時には肉食もアリ」、『AERA』2020年3月9日号。
- 伴野準一、『イルカ漁は残酷か』、平凡社新書、2015年。
- マーク・ホーソーン、『ビーガンという生き方』井上太一訳、緑風出版、2019年。

目黒峯人、『イルカ・クジラ解放』、動物解放団体リブ。 <https://animal-liberator.net/about/>
スティーヴン・M・ワイズ、「動物の権利、一歩ずつ着実に」、サンステイン／ヌスバウム
編『動物の権利』、23～66 頁に所収。

和歌山県、「太地町でのイルカ漁業に対する和歌山県の公式見解」。
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071500/iruka/index.html>

Bird, Stephanie J. “Declaration of Rights for Cetaceans: Ethical and Policy Implications of Intelligence.” In the web program of 2012 Annual Meeting of America Association for the Advancement of Science. <https://aaas.confex.com/aaas/2012/webprogram/Session4617.html>

Calamur, Chrishnadev. “N.Y. Judge Amends Habeas Corpus Order For Chimps.” NPR April 22, 2015. <https://www.npr.org/sections/thetwo-way/2015/04/22/401519113/n-y-judge-amends-habeas-corpus-order-for-chimps>

Gaarder, Emily. “The ‘Gender’ Question of Animal Rights: Why are Women the Majority?” Paper submitted for the 2006 ASA meeting. Found in Paper Archive of ASA Annual Meetings.

The Helsinki Group. “Declaration of Rights for Cetaceans: Whales and Dolphins.” May 22, 2010. <https://www.cetaceanrights.org>

Jasper, James M., and Jane D. Poulsen. “Recruiting Strangers and Friends: Moral Shocks and Social Networks in Animal Rights and Anti-nuclear Protests.” *Social Problems* 42-4 (1995): 493-512.

Kiem, Brandon. “Chimpanzees Take a Huge Step Toward (Some) Human Rights.” *Wired*. APR 21, 2015. <https://www.wired.com/2015/04/chimpanzee-rights-may-become-reality/>

Kruse, Corwin R. “Gender, Views of Nature, and Support for Animal Rights.” *Society & Animals* 7-3 (1999): 179-98. <https://www.animalsandsociety.org/wp-content/uploads/2015/10/kruse1.pdf>

Lowe, Brian M., and Caryn F. Ginsberg. “Animal Rights as a Post-Citizenship Movement.” *Society and Animals* 10-2 (2002): 203-15. <https://www.animalsandsociety.org/wp-content/uploads/2015/11/lowe.pdf>

Peter Singer. “Animal Liberation.” *The New York Review of Books* April 5, 1973 Issue. https://www.nybooks.com/articles/1973/04/05/animal-liberation/?lp_txn_id=1481068

———. *Why Vigan?* London: Penguin Books, 2020.

State of New York Court of Appeals. “Motion No. 2018-268: In the Matter of Nonhuman Rights Project, Inc., on Behalf of Tommy, Appellant, v. Patrick C. Lavery, &c., et al., Respondents.” May 8, 2018. <https://www.nycourts.gov/ctapps/Decisions/2018/May18/M2018-268opn18-Ddecision.pdf>

———. “June 14, 2022 Decision No. 52: In the Matter of Nonhuman Rights Project, Inc., &c., Appellant, v. James J. Breheny, &c., et al., Respondents.” <https://www.nycourt>

s.gov/ctapps/Decisions/2022/Jun22/52opn22-Decision.pdf

Supreme Court of the State of New York. “Order to Show Cause & Writ of Habeas Corpus.” Apr. 20, 2015. <https://iapps.courts.state.ny.us/fbem/DocumentDisplayServlet?documentId=4D9287VfBiI66TYZPi4P1w==&system=prod>

———. “Amended Order to Show Cause.” Apr. 21, 2015. <http://www.nonhumanrightsproject.org/wp-content/uploads/2015/04/Amended-Order-to-Show-Cause-Hercules-and-Leo.pdf>

———. “Decision and Order.” Jul. 29, 2015. <https://web.archive.org/web/20160722055931/http://www.nonhumanrightsproject.org/wp-content/uploads/2015/07/Judge-Jaffes-Decision-7-30-15.pdf>